

御法卷の光源氏

上野 辰 義

はじめに

一 厳格な出家観

二 紫上他界

三 紫上他界以後

源氏物語御法卷は光源氏最愛の妻紫上の死を語る巻だが、それは同時に正編の主人公光源氏の一生を束縛し、彼の人生の総括と終結へと向かわせていく最終的な条件を作っていく巻でもある。そのさまを、彼の道心と紫上を軸とした人間執着などの面から整理した。

はじめに

光源氏五十一歳の一年を語る御法巻において、語られるべき最重要な事件が彼の最愛の妻紫上の死であることは、特に説明を要しないだろう。それは光源氏と三十年以上に亘り人生を共にした女主人公自身の死であるからであり、また同時に、後に残った光源氏に最終的に大きな影響を与えるものだったからである。後者については、神野藤昭夫氏が整理されたごとく、この御法巻に続いて紫上亡き後の光源氏最後の一年を語る幻巻理解にとつて、「生涯の果てに出家を志向しつつなお惑える光源氏の孤影の主題」と、紫上を「哀傷する光源氏の姿に（桐壺巻以来の——引用者注）生涯にわたる愛の遍歴物語の閉じめの主題」との二つを調和統一的にどう読み解いていくかということが肝要であろうが、この二つの主題は、御法巻の紫上の死によつて顕在化したものであった。であるならば、この二つの主題は、紫上の死の前後においてどのように顕在化したのか、そしてさらに、神野藤氏も阿部秋生氏の論稿「六条院の述懐」を引き合いに出して言及されているように、幻巻においても繰り返し返される光源氏の述懐の存在によつて、「哀傷をつきぬけて、光源氏の人生がたどりつき総括される巻としての幻の一面が明らかにされたとい」えるのだが、ほ

同内容の述懐は既に御法巻でも紫上の死後なされており、光源氏の生涯の最終的な総括活動は、御法巻において既に開始されているのである。しかも、やはり阿部氏が関連を指摘された、若菜下巻の半生の回顧に「残りともれる齡の末にも、飽かず悲しと思ふこと多く、あぢきなくさるまじきことにつけても、あやしくもの思はしく、心に飽かずおぼゆること添ひたる身にて過ぎぬれば」（若菜下二〇六）⁽⁴⁾とあつた人生の不満・不如意意識が、御法巻の述懐にはなく、幻巻の述懐では、

「この世につけては、飽かず思ふべきことをさをさあるまじう、高き身には生まれながら、また人よりことに口惜しき契りにもありけるかな、と思ふこと絶えず」⁽⁵⁾（幻五二五）

と、言及はあるが、自省する対象として客体化されている。さらに、若菜下巻ではそうした不満・不如意意識の吐露に続けて、「それにかへてや、思ひしほどよりは、今までもながらふるならむ、となむ思ひ知らるる」と、その代償として予想以上の存命を得ているとの認識を示しているが、御法・幻両巻の述懐では、その長命も世の無常を深く知り仏道に入るべき仏の導きだったと、全く異なる認識に変化している。⁽⁶⁾

こうした光源氏の人生総括の内容・質の変化には、紫上

の死が深く関わっているのである。以上のような変化が、紫上の死の前後でどのように生じ、彼の人生把握の行き着く幻巻にどのような繋がっていくのかを、考えてみたい。

一 厳格な出家観

御法巻冒頭、衰弱する一方の紫上が繰返し出家を願つても、光源氏は許さない。出家するならもともと世俗を捨て、お互いを顧みない厳格な出家生活を想定するが、紫上の病状を見捨てがたく、出家後の障りにもなるべく思われたからであった。

さるは、わが御心にも、しか思しそめたる筋なれば、かくねむごろに思ひたまへるついでにもよほされて、同じ道にも入りなむと思せど、一たび家を出でたまひなば、仮にもこの世をかへりみむとは思しおきてず、後の世には、同じ蓮の座をも分けむと契りかはしきこえたまひて、頼みをかけたまふ御仲なれど、ここながら勤めたまはむほどは、同じ山なりとも、峰を隔ててあひ見たてまつらぬ住み処にかけ離れなんことをのみ思しもうけたるに、かくいと頼もしげなきさまに悩みあついたまへば、いと心苦しき御ありさまを、今はと行き離れんきざみには棄てがたく、なかなか山水の住み処濁りぬべく、思しとどこほるほどに、ただうちあ

さへたる思ひのままの道心起こす人々には、こよなう後れたまひぬべかめり。
(御法四九四)

この厳格な出家観はいつどのように形成されてきたのか。三十九歳の藤裏葉巻では、光源氏は出家について次のように考えていた。

大臣も、長からずのみ思さるる御世のこなたにと思しつる御参り、かひあるさまに見たてまつりなしたまひて、心からなれど、世に浮きたるやうにて見苦しかりつる宰相の君も、思ひなくめやすきさまに静まりたまひぬれば、御心落ちぬはてたまひて、今は本意も遂げなん、と思しなる。対の上の御ありさまの見棄てがたきにも、中宮おはしませば、おろかならぬ御心寄せなり。この御方にも、世に知られたる親ざまには、まづ思ひきこえたまふべければ、さりとともとおぼしゆづりけり。夏の御方の、時々にはなやぎたまふまじきも、宰相のものしたまへば、とみなとりどりにうしろめたからず思しなりゆく。

(藤裏葉四五三)

東宮に入内した明石姫、雲居雁と結婚した夕霧など子どもたちや、養子養女の後ろ盾のある紫上・花散里ら妻たちの将来に不安がなくなつたと見て、年来の出家の願いを実現しようと思うようになった。ここでは紫上も出家の足かせとは認識されていない。だがその後、准太上天皇の地位を

得、女三宮の後見を受諾することになる、出家した朱雀院を見舞う場面では、

「故院に後れたてまつりしころほひより、世の常なく思うたまへられしかば、この方の本意深くすすみはべりにしを、心弱く思うたまへたゆたふことのみはべりつつ、つひにかく見たてまつりなしはべるまで、後れたてまつりはべりぬる心のぬるさを、恥づかしく思うたまへらるるかな。身にとりては、ことにもあるまじく思うたまへ立ちはべるをりあるを、さらにいと忍びがたきこと多かりぬべきわざにこそはべりけれ」と、慰めがたくおぼしたり。

(若菜上四六)

と、出家を思い立つ折々があるが、実行するにはまことに耐えがたいことが多く出来る筋合い・道理であった、と言っている。これは、先の藤裏葉巻の心中が語られてから間もない同年の冬で、病のため女三宮など気がかりな子を残しながら出家した兄院を見舞った場面であるから、出家を思い立ちながらも実行するまでには至っていない自己の状況を卑下し、ほだしをかえつつ出家に至った朱雀院の心中を考慮した、多分に挨拶の言辞とみられる。「さらにいと忍びがたきこと多かりぬべきわざにこそはべりけれ」は、光源氏にとっては一般論的な判断で、出家を思い立つ光源氏にこれに類する思いが湧いていても、出家を押しと

めるまでには至っていないものであろう。

その後、六条院入りした女三宮の後見役となることで、出家の条件は後退し、紫上の出家希望に対しても、要は「ただかく何となく過ぐる年月なれど、明け暮れの隔てなきうれしさのみこそ、ますことなくおぼゆ」(若菜下二〇八)る存在になっていた紫上を自分より先に出家させることができず、紫上の大患後は紫上が心配で落ち着かず、出家する心境でなくなり、女三宮が尼になった以後も、これらの条件は光源氏にとって主観的に変化するものではなかったから、彼は出家せずにきた。

その間、光源氏は出家を思い立ちながらも、女三宮の後見受諾のみならず、臘月夜との関係復活、柏木と通じ不義の子を懐妊した女三宮への恋慕持続(若菜下二五九)、尼になった女三宮の若さに対する未練ほのめかし(鈴虫三八二)、自己の藤壺とのいきさつに由来する女三宮を寝取った柏木への非難の不徹底(「恋の山路はえもどくまじき御心まじりける」へ若菜下二五五)、落葉宮との醜聞を起こした夕霧への同情(「かたはなるところなうねびとのほりたまへる、ことわりぞかし、女にて、なかめでざらむ、鏡を見ても、なかおごらざらむ、とわが御子ながらも思す」(夕霧四七二)、など恋情への共鳴を保持しつつ、また、冷泉院後嗣不在への不満(若菜下一六五)、密通して

出家するに至った女三宮に対する無念（横笛三五二）など、世俗の価値への執心を捨てきれずにいた。

つまり、出家の意向は頭にながらも、行動を起こさせる心底からのやむにやまれぬ情動はなかったたのである。

この間の光源氏の出家に関する言動を拾ってみると、前掲の出家した朱雀院を見舞う箇所や、紫上の出家願望に対して、紫上のために出家せずにいると自己の不出家の責任を彼女に押し付けている他は（若菜下一六七・二二四）、朧月夜と朝顔前斎院の出家後、朱雀院からの手紙を見つつ、女三宮に次のように言う箇所がある。

いにしへより本意深き道にも、たどり薄かるべき女がたにだにみな思ひおくれつつ、いとぬるきこと多かるを、みづからの心には、なにばかりおぼし迷ふべきにはあらねど、今はと捨てたまひけむ世の後見におきたまへる御心ばへの、あはれにうれしかりしを、ひき続きあらそひきこめるやうにて、同じさまに見捨てたてまつらんことの、あへなくおぼされむに包みてなむ。心苦しと思ひし人々も、今はかけとどめらるるほだしばかりなるもはべらず。女御も、かくてゆく末は知りたけれど、御子たち数そひたまふめれば、みづからの世だにのどけくはと見おきつべし。そのほかは、誰も誰も、あらむに従ひて、もろともに身を捨てむをも

しかるまじき齢どもになりたるを、やうやう涼しく思ひはべる。（若菜下一二六九）

ここでは、光源氏が出家しないのを朱雀院への義理立てといい、紫上の事は触れない。注意されるのは、朧月夜や前斎院の出家を意識して「たどり薄かるべき女がたにだにみな思ひおくれつつ」と、女性が世の理を悟りがたいはずと女と男の認識法の差に言及していることである。同様のことは、鈴虫巻で、対面した秋好中宮が出家の意向をほのめかし、母六条御息所の菩提を弔いたい、と述べた際にも口にしてゐる。

「定めなき世といひながらも、さして厭はしきことなき人の、さはやかに背き離るるもありがたう、心やすかるべきほどにつけてだに、おのづから思ひかかづらふ絆のみはべるを、などか、その人まねにきほ御道心は、かへりてひがひがしう推しはかりきこえさする人もこそはべれ。かけてもいとあるまじき御ことになむ」…。「目蓮が、仏に近き聖の身に、たちまちに救ひけむ例にも、え継がせたまはざらむものから、玉の釵捨てさせたまはんも、この世には恨み残るやうなるわざなり。やうやうさる御心ざしをしめたまひて、かの御煙はるくべきことをせさせたまへ。…」。

（鈴虫三八八）

ここでは、女性である秋好中宮に対して「たどり薄かるべき女がた」などという言辭は用いていないが、「さして厭はしきことなき人の、さはやかに背き離るるもありがたう」、「その人まねにきほふ御道心」、などと言って、自身の心底からの厭世観がなければ、出家しても「この世には恨み残るやうなるわざ」となる、と言っている。光源氏には臘月夜や朝顔宮の出家がこれに類するように、そしてそれは既に尼になった女三宮も含めて、「たどり薄かるべ」く見えたのだろう。出家した女三宮に関しては後の幻巻で、「何ばかり深う思しとれる御道心にもあらざりしかど、…、かくあさへたまへる女の御心ざしにだにおくれぬることと口惜しう思さる」（幻五三二）とある。

同様の見方は朱雀院も、臘月夜や娘たちに示している。朱雀院の後を追って尼になろうとした臘月夜には、「かかるきほひには、慕ふやうに心あわたし、と諫めたまひ」（若菜上七六）、また、母御息所の死後尼になろうとした落葉宮には、後見のない女性が尼になって後、男と醜聞が起きたら非難を浴びる、父である自分や妹女三宮が既に出家しており、落葉宮まで「かならずさしも、やうのこととあらそひたまはむも、うたてあるべし。世のうき（引用者注、夕霧との醜聞）につけて厭ふは、なかなか人わろきわざなり。心と思ひとる方ありて、いますこし思ひしづめ心

澄ましてこそともかうも」（夕霧四六〇）とさとする。これも結果的に女性是十分冷静に思慮せずに、衝動的に出家しがちだとの認識をうかがうことができる。

つまり、世を厭い出家するに際し、「たどり薄かるべき」「あさへたまへる」女性たちに対し、その対極にいる男たちが想定され、御法巻初に見られた光源氏の厳格な出家観も、これを土台にしているとみられる。同所に見られた、「ただうちあさへたる思ひのままの道心起こす人々」は、源氏物語では女三宮らの女性たちであり、幻巻でそうした「あさへたる」出家を光源氏に避けさせようとした明石御方は男性的な判断を口にしたといえる（幻五三四）。ただ、その際、明石御方は「いとおとなびて聞こえたる気色」と評されるから、この対立の本質は、男性と女性ではなく、思慮深い成人と、「あさへたる」思慮不足者とにあるのだが、それが源氏物語では、ほぼ男性と女性の対立に結びついている、あるいは光源氏にはその対立として意識されたということなのであろう。御法巻初に見られた光源氏の出家観に、「一たび家を出でたまひなば、仮にもこの世をかへりみむとは思しおきてず」とある厳しさも、そうしたもののからの発展と見るべきなのだろうが、母方のおじである雲林院の律師の存在や、母方の一族である明石入道が明石姫誕生を機に山中に跡を絶えた見聞などが影響しているの

であろう。

この男性に傾斜する厳格な出家観は、結局、子孫の安定・繁栄を含む自身の栄華や、恋情への理解など、世俗の価値を捨てきれない光源氏が出家せずにいることを自らに許し、また逆に世俗になぜい続ける光源氏の姿を明らかに照らし出すものである。

これが、紫上の死により崩れはじめた。

二 紫上世界

紫上は、法華經千部供養の後、夏を経て衰弱しつづけ、養女の明石中宮と光源氏に看取られて、八月の十四日に亡くなり、十五日にかけて即日葬送された。

宮は御手をとらへたてまつりて泣く泣く見たてまつりたまふに、まことに消えゆく露の心地して限りに見えたまへば、御誦經の使ども数も知らずたち騒ぎたり。さきさきもかくて生き出でたまふをりにならひたまひて、御物の怪と疑ひたまひて一夜さまさまのことをし尽くさせたまへど、かひもなく、明けはつるほどに消えはてたまひぬ。

(御法五〇六)

やがて、その日、とかくをさめたてまつる。：。昔、大将の君の御母君亡せたまへりし時の暁を思ひいづるにも、かれはなほもののおぼえけるにや、月の顔のあ

きらかにおぼえしを、今宵はただくれまどひたまへり。

(御法五一〇)

この、紫上の死と葬送、正日(四十九日・一周忌)頃までの光源氏の精進の日々の様子は、同じ秋に亡くなった三十九年ほど前の葵上の他界の際の様子を想起させつつ、それと呼応するところが多々あるが、これも、葵上の死直後に、殿の内人少なにしめやかなるほどに、にはかに、例の御胸をせきあげて、いといたうまどひたまふ。内裏に御消息聞こえたまふほどもなく、絶え入りたまひぬ。：。

御物の怪のたびたび取り入れたてまつりしを思して、御枕などもさながら二三日、見たてまつりたまへど、やうやう変りたまふことどものあれば、限りと思しはつるほど、誰も誰もいといみじ。(葵四六)人の申すに従ひて、いかめしきことどもを、生きや返りたまふ、とさまさまに残ることなく、かつそこなはれたまふことどものあるを見る見るもつきせず思しまへど、かひなくて日ごろになれば、いかがはせむとて鳥辺野に率てたてまつるほど、

(葵四七)

とあつたのと重ねると、紫上の場合、物の怪による仮死を疑つて、考え得る限りの手当てをしたが、蘇生せず、「消えは」つ、即ちもう動かしやうもない彼女の死を確認した

ということが、よく理解できる。そのショックを思うべきであるし、実際、この後夕霧に紫上の死後の剃髪を命じたあと、夕霧が几帳の帷子をあげて紫上の死に顔をのぞいた際に、光源氏は「かく何ごともまだ変わらぬ気色ながら、限りのさまはしるかりけるこそ」(御法五〇九)と語っている。紫上の死を確認したということが、そのまま、紫上の即日葬送へとつながっていく理由の一つなのだろう。葵巻では、父左大臣が数日にわたって葵上に蘇生術をさまざま施したが、甲斐なく遺体も損なわれてしまった。その記憶もおそらく作用した。

そうした紫上の死を確認したうえで、の惑乱の中で、光源氏は、紫上が光源氏に拒まれて心中恨んでさえた生前の出家の願いを、死後ながらせめて後世の導きにと叶えようとする。

「かく今は限りのさまなめるを、年ごろの本意ありて思ひつること、かかるさきぎみにその思ひ違へてやみなむがいといとほしきを、。この世にはむなしき心地するを、私の御しるし、今はかの冥き途のとぶらひにだに頼み申すべきを、頭おろすべきよしものしたまへ。
」
(御法五〇七)

しかし、夕霧は光源氏の口にした「この世にはむなしき心地するを」(つまり、「いまさら蘇生も平癒もせず、今生の

ことにはなんの益にもならないが」新編日本古典文学全集本頭注)を衝き、死後の落飾の無意味さを指摘した。物の怪のなせるわざならば、落飾は蘇生・延命、極楽往生の功德までも期待でき、意味があるが、本当に死んだのならば、髪を剃っても後世の導きにはならず、眼前の悲しみばかりがつものだろう(御法五〇八)、と。この夕霧の指摘に対する光源氏の反応は何も語られず、沈黙で終わるが、この夕霧の正論は、紫上の生前にその出家の願いを拒んだ光源氏の自己中心的な身勝手な言動と、彼女の死後に剃髪させるという甘えた思いやりの偽善とを、あぶりだすものだ。この仏弟子になるという紫上の尊い決意をもてあそんだ自身の言動のもたらした結果が、眼前の紫上の死という生涯最大の悲しみの招来であったと、光源氏はここで気づかされたのではないか。このことが、この後の述懐に見られる私の仕向け、己が「いはけなきほどより、悲しく常なき世を思ひ知るべく仏などのすすめたまひける身」であったことを意識するようになるきっかけであった可能性がある。このことに關しては、御法巻の述懐に先立つ若菜下巻の光源氏四十七歳の時点での半生の回想時に、

「みづからは、幼くより、人に異なるさまにて、ことごとしく生ひ出でて、今の世のおぼえありさま、来し方にたぐひ少なくなむありける。されど、また、世に

すぐれて悲しき目を見るかたも、人にはまさりけりかし。まづは、思ふ人にさまざまおくれ、残りともれる齡の末にも、飽かず悲しと思ふこと多く、あぢきなくさるまじきことにつけても、あやしくもの思はしく、心に飽かずおぼゆること添ひたる身にて過ぎぬれば、それにかへてや、思ひしほどよりは、今までもながらふるならむとなむ思ひ知らるる。：。」

（若菜下二〇六）

とあつて、ここで「飽かず悲しと思ふこと多く、あぢきなくさるまじきことにつけても、あやしくもの思はしく、心に飽かずおぼゆること添ひたる身にて過ぎぬれば」と言っているように、この時点での人生認識が、不如意感不滿意識の強いもので、光源氏がここでは、人生の背後にいまだ仏の出家へのおもむけまでを意識しているとは見られないことも、想起される。⑦ こうしてこの紫上死後剃髪的一件に、光源氏における自身の愛執の罪の最終的な認識と、紫上に対する悔悟の淵源が見えるだろう。

三 紫上他界以後

このことを基盤として、御法巻の八月十四日に紫上が他界して以後、光源氏の内面を考えるのに大事な点がさらに二つある。一つは、紫上を即日葬送した十五日の朝に、さ

し昇る陽を受けて消えていく露に、世の無常と厭わしさがこみあげて、光源氏は紫上を失った悲しみにまぎれて、出家の本意を遂げようかとも思うが、女の死が原因で気弱く出家したと後世まで語り草になることを憚り、出家を先送りしたこと。

かかる悲しさの紛れに、昔よりの御本意も遂げてまほしく思ほせど、心弱き後のそしりを思せば、このほどを過ぐさんとしたまふに、胸のせきあぐるぞたへがたかりける。

（御法五一）

「このほど」とは多くの現代注釈書に「この当座」と訳されるように、紫上他界後の諸事が行われる期間であろうが、この思いはその後も、諸所からの弔問を受ける中でも、人にほけほけしきさまに見えじ、今さらにわが世の末に、かたくなしく心弱きまどひにて、世の中をなん背きにけると、流れとどまらん名を思しつつむになん、身を心にまかせぬ嘆きをさへうち添へたまひける。

（御法五一四）

と語られ、また、弔問も一段落し、女方に籠って行いをするころにも、

今は蓮の露も他事に紛るまじく、後の世を、とひたみに思し立つことたゆみなし。されど人聞きを憚りたまふなん、あぢきなかりける。

（御法五一八）

と、示されている。

この世評を氣にして出家を抑える期間は、当初「このほど」と語られていたが、幻巻に入つて翌年一月には、

かく、心変はりしたまへるやうに、人の言ひ伝ふべき
ころほひをだに思ひのどめてこそは、と念じ過ぐした
まひつつ、憂き世をもえ背きやりたまはず。

(幻五二七)

と、「心変はりしたまへるやう」、即ち、紫上他界直後の
「悲しさ」「かたくなしく心弱きまどひ」等、動揺が落ち
着いてきても、「我ながら、ことのほかにほれほれしく思
し知らるること多かる」(御法五一七)・「月ごろにほけに
たらむ身のありさま」「思ひほれてなん人にも見えざむな
る」(幻五二七) 茫然自失の状態が続く段階での出家を思
いとどまり、結局翌春における出家の準備をする幻巻年末
にまで至る。このように紫上死去と関わりなく冷静な意識
と判断で出家したと世間から判断されるにいたる状況に到
達するまでの認識を、光源氏がどのように作り上げていっ
たか、の問題である。

もう一つは、葬送後四十九日の忌に籠る中で、それまで
の人生を振り返る述懐に続けて、

今は、この世にうしろめたきこと残らずなりぬ、ひた
みちに行ひにおもむきなんに障りどころあるまじきを、

いとかくをさめん方なき心まどひにては、願はん道に
も入りがたくや、とややましきを、「この思ひすこし
なのめに、忘れさせたまへ」⁽⁸⁾、と阿弥陀仏を念じたて
まつりたまふ。

(御法五二三)

と、出家して仏道修行をするためにも、紫上を亡くした悲
しみを、障りのない程度に尋常に落ち着けてくれと、阿弥
陀仏に念じていることである。完全に悲哀を滅却すること
ではないことが注意される。出家に向けて紫上に対する思
いをどう落ち着けていったのかという問題である。この二
つは別個の問題ではなく、縊り合わさっており、かつまた、
光源氏の述懐に代表される、彼自身の人生把握とも連動し
ているものだろう。そして同時に確認しておかないといけ
ないことは、引用した諸条に見られるように、光源氏の内
面において出家することは既定のものだということである。
ただその実行の適切な時期を、外聞・自身の精神的動揺と
の関係で見定めようとしているにすぎないのである。した
がって、前掲の今上帝以下、諸所からの懇切な弔問がしき
る中、語り手の語る光源氏の様子、

思しめしたる心のほどには、さらに何ごとも目にも耳
にもとまらず、心にかかりたまふことあるまじけれど、
人にほけほけしきさまに見えじ、今さらにわが世の末
にかたくなしく心弱きまどひにて、世の中をなん背き

にける、と流れとどまらん名を思しつゝむになん、身を心にまかせぬ嘆きをさへうち添へたまひける。

(御法五一四)

に見える「思しめしたる心のほど」を、孟津抄(源氏物語古注集成5)のように「紫の事より外には別に心に何事もつかぬと也」とする一方、岷江入楚(国文学註釈叢書9)箋説のように「源の出家の事なり。おぼしたつ心のほどはすゝめども」と光源氏の出家の決意に解する説も出現するのである。

こうして、自身も出家せず、紫上をも生前出家させずに喪失してしまったことで、背後に仏のおもむけを見るようになる自身の人生の把握に至りながらも、その出家を紫上の喪失による自身の精神的動揺と外聞との関係で実行できずにいるのが、御法卷末における光源氏の状況なのだが、ここから逃れるべく光源氏の採った方途が、女方に入つて勤行をすること、そしてそれと関わりつつ外部との接触を断つことであつた。まず前者。御法卷末に見える。

すくよかにも思されず、我ながら、ことのほかにほれぼれしく思し知らるること多かる紛らはしに、女方にぞおはします。仏の御前に人しげからずもてなして、のどやかに行ひたまふ。千年をもろともにと思ししかど、限りある別れぞいと口惜しきわざなりける。今

は蓮の露も他事に紛るまじく、後の世をと、ひたみちに思し立つことたゆみなし。されど人聞きを憚りたまふなむ、あぢきなかりける。

(御法五一七)

「女方」という語は、源氏物語では結婚相手や恋人である女性の側を示すがほとんどだが、ここでは妻や侍女たちが生活と家事職務の遂行を行う奥向きのエリアを指す。具体的には淵江文也氏が、「妻紫上の居間の方へ源氏は常住の生活に移した」「紫上の臨終の床が今は二条院の仏間・仏壇で『仏の御前』というわけである」と言われるあたりが事実に近いだろう。そこでの「行ひ」の目的は、新日本古典文学全集本五一八頁頭注二の指摘どおり、光源氏と紫上は「後の世には、同じ蓮の座をも分けんと契りかはしきこえたまひて、頼みをかけたたまふ御仲」(御法四九四)であつたから、ここでの光源氏の極楽往生を願う勤行の目的は紫上との再会であつたかもしれないが、紫上が往生した明証は、一周忌を過ぎた幻卷十月になつても、「大空を通ふ幻夢にだに見え来ぬ魂のゆくへ尋ねよ」と詠じたように、光源氏にはない。また、光源氏は一蓮托生を藤壺宮とも願ひ(朝顔四九六)、女三宮にも口にしてゐる(鈴虫三七六)。だから、光源氏がこれから一年後、幻卷の年末において出家の準備をしていく頃には、将来紫上と再会する願いを含むものだったとしても、その意識のおおよそは、い

わゆる後世での極楽往生を期するものに近いものになっていたのであろう。

この仏道修行は、そのように極楽往生をめざした後世を願う勤行であるが、同時に光源氏の気持ちを紛らわせ、落ち着かせる効果もあったと思われる。これに先立つ御法巻の述懐で「阿弥陀仏を念じ」たのも「この思ひ少しなために忘れさせたまへ」という理由であつたし、阿弥陀仏は、鎌倉初期の『無名草子』に、「人の恨めしきにも、世の業のわびしきにも、ものの羨ましきにも、めでたきにも、ただいかなる方につけても、強ひて心にしみてもののおぼゆる慰めにも、『南無阿弥陀仏』とだに申しつれば、いかなることもこそとく消え失せて、慰む心地することにて侍れ¹」と言われている。この後も、光源氏は、幻巻の一月に、女房たちと女三宮降嫁時の思い出を語って紫上を追慕した後にも、「例の、紛らはしには、御手水召して行ひしたまふ」（幻五二四）とある。三月、明石御方を訪れて、紫上を回顧して、夜を過ぎず帰ったあとに、「さてもまた例の御行ひに、夜半になりてぞ、昼の御座にいとかりそめに寄り臥したまふ」（幻五三六）とあるのも、紫上への思いを紛らわせる意図があつたのだろう。逆に、その後の五月の夕霧の推測した光源氏の行いのさまや（幻五四〇）、八月紫上一周忌の宵の行いに入る手水の際に、中将の君と交

わした歌（幻五四四）からは、紫上への思いで、行いに集中できない、あるいはしにくい状況がうかがえる。読経や念仏は意識を集中することだから、気持ちを落ち着かせ紛らわせるのに役立ったことだろう。

そして後者の、外部との接触を断つこと。幻巻頭に見える。

春の光を見たまふにつけても、いとどくれまどひたるやうにのみ、御心ひとつは悲しきの改まるべくもあらぬに、外には例のやうに人々参りたまひなすれど、御心地なやましきさまにもてなしたまひて、御簾の内におはします。兵部卿宮渡りたまへるにぞ、たうちとけたる方にて対面したまはんとて、御消息聞こえたまふ。

わが宿は花もてはやす人もなしなにか春のたづね来つらん
（幻五二二）

さらに同じ一月に、次のように詳しい。

疎き人にはさらに見えたまはず。上達部なども睦ましき、また御はらからの宮たちなど常に参りたまへれど、対面したまふことをさをさなし。人に対はむほどばかりは、さかしく思ひしづめ心をさめむと思ふとも、月ごろにほけにたらむ身のありさまかたくなしきひが事まじりて、末の世の人にもてなやまれむ、後の名さへ

うたてあるべし、思ひほれてなん人にも見えざむなる
と言はれんも同じことなれど、なほ音に聞きて思ひや
ることのかたはなるよりも、見苦しきことの目に見る
は、こよなく際まさりてをこなり、と思せば、大將の
君などにだに、御簾隔ててぞ対面したまひける。かく、
心変りしたまへるやうに、人の言ひ伝ふべきころほひ
をだに思ひのどめてこそはと念じ過ぐしたまひつつ、
うき世をもえ背きやりたまはず。御方々にまれにもう
ちほのめきたまふにつけては、まづいとせきがたき涙
の雨のみ降りまされば、いとわりなくて、いづ方にも
おぼつかなきさまにて過ぐしたまふ。(幻五二七)

つまり、紫上の死後呆けて間違ひもついしでかし、周りに
嫌がられ語り草となるのをさけて、兵部卿宮・夕霧のよう
な特別親しい者や身内にしか対面せず、また、涙脆さを隠
して女君たちにも対面はまれだった。この女方に籠り御簾
の内に過ぐすのは、紫上の四十九日に籠った状態を継続さ
せた一面を持つが、意図は前掲の「かかる悲しさの紛れに、
昔よりの御本意も遂げてまほしく思はせど、心弱き後のそ
しりを思せば、このほどを過ぐさんとしたまふ」・「人にほ
けほけしきさまに見えじ、今さらにわが世の末に、かたく
なしく心弱きまどひにて、世の中をなん背きにけると、流
れとどまらん名をおぼしつゝむ」などとあった、女の死が

原因で気弱く出家したと後世まで語り草になることを憚つ
たためである。

このように女方に籠って勤行をし、外部との接触を断つ
中で、光源氏は具体的にどのような己の人生を把握し、紫
上への思いを落ち着かせ、世間の非難を受けない出家へと
歩を進めていったのだろうか。このことはこうした環境や
単なる時間の流れが自然ともたらししたものではない。これ
らに関わりつつ、この中における光源氏自身の営為が当然
関わっているのである。そして、そのことは逆に、御法巻
ではいまだ明確に語られない、紫上の他界が光源氏の人生
認識に与えた意味の大きさを照らし出すものである。
光源氏最後の一年を春を中心に十二箇月に亘って語ってい
く幻巻は、そのような光源氏の営為の場であるのだが、そ
の詳細は、稿を改めて述べてみたい。

注

- (1) 神野藤昭夫氏「晩年の光源氏像をめぐる」(『今井卓爾傳
土古稀記念 物語・日記文学とその周辺』一九八〇年九月、
桜楓社)
- (2) 阿部秋生氏「六条院の述懐」(『光源氏論 発心と出家』一
九八九年、東京大学出版会)
- (3) 御法巻と幻巻、さらには若菜下巻の述懐相互の展開と質の
相違については、拙稿「光源氏の述懐―御法巻と幻巻の間

―『京都語文』16、二〇〇九年十一月）で論じた。

(4) 源氏物語の引用は、新編日本古典文学全集による。漢数字は頁数。

(5) この仏の導きという認識が、光源氏に生じる事情に、己のみならず紫上の出家をも妨げていた光源氏の罪の意識があるだろう。注3拙稿参照。なお後述。

(6) 紫上の即日葬送の事情は、要は日の吉凶（小右記長保元年十二月二日條には、太皇太后昌子内親王の葬儀に遺令により重日を避けなかったとある）、近親者の忌日などを考慮した日程の問題としてあり、源氏物語としては光源氏が関わった夕顔・葵上らの八月は同時期の葬送の体験との比較、生前の美しいままでの紫上の昇天、あとに残される者の深い喪失感、その結果としての竹取物語引用、ということになる。

桧垣泰代『『紫上』の葬送』（『国文論藻』1、二〇〇二年）、高田信敬『紫上葬送―御法巻箋註―』（『むらさき』37、二〇〇〇年十二月）、河添房江『源氏物語の内なる竹取物語』（『源氏物語表現史論と王権の位相』）など、参照のこと。

(7) 注3拙稿参照。

(8) 「やましきを、この思ひすこしなめに忘れさせたまへ」の部分、源氏物語大成校異篇によれば、麥生本・阿里莫本に「つゝましきを、この思ひすこし忘れさせたまへ」とある。

(9) 御法巻末における、拾遺和歌集恋一、六九四番のよみ人しらず歌を引く「今日やとのみ、わが身も心づかひせられたまふをり多かるを」（五一八）を、新編日本古典文学全集本頭注では、紫上への恋死ではなく、「在俗の生活の限り、の意と解している」とする。これも光源氏における明確な出家の意思の存在を読みとるものだろう。

(10) 淵江文也氏「論注 御法」『源氏物語の思想』桜楓社、一九八三年四月。

(11) 無名草子の引用は、新潮日本古典集成本による。